概要版　　平成 23 年 10 月 21 日

# 「小中学生の語彙に関する第一回全道調査」の概要について

北海道国語教育連盟委員長　　福　田　信　一
（札幌市立幌北小学校長）

## 調査の概要

＜調査の趣旨＞

・教室内で、語彙が少ないことに起因するトラブルが増えている。また、若者の間では、「かわいい」「かわいそう」「うれしい」「やばい」などの言葉だけで、感情のほとんどを表現するかのような風潮が見られる。

「ら抜き言葉」や「若者言葉」等は、いつの時代にあっても見られる現象の一つでありやがて淘汰されていく運命にある。しかし、日常生活を豊かにする語彙が、どんどん失われているとすれば極めて深刻な問題である。そのことを、実証的に調査した事例は、全国的にも近年ほとんどない。文部科学省のコミュニケーション教育推進会議から８月に出された審議経過報告では、子ども達の現状や課題は、次のように述べられている。
①子ども達は気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向がある
②インターネットが普及している一方、外での遊びや自然体験等の減少により、身体性や身体感覚が乏しくなっていることが、他者との関係づくりに負の影響を及ぼしている。

小学校で本年度から全面実施され、中学校では次年度から全面実施される新学習指導要領では、言語活動の充実により、コミュニケーションに関する能力や感性を育んだり、情緒を養ったりすることが期待されている。子ども達を取り巻く現状を真正面からとらえて授業づくりをしていくことが何よりも大切になる。物語の読み取りを例にすると、「うれしい」「かわいそう」「悲しい」などの言葉で場面や状況をくくってしまうと、思考はその場で停止してしまう。場面や状況を具体的に表現する、「美しい言葉」を探す、「はじめて知った言葉」や「覚えておきたい言葉」「いいなと思う言葉」を見付ける。そういう言語活動を繰り返すことによって、感想を述べる時にも「楽しかった」「おもしろかった」だけでは満足しない子どもが育つ。

私たち北海道国語教育連盟では、全道のすべての教室の国語の時間で確実に子ども達の語彙を増やし、日常生活に生きて働く言葉の力を育てる言語活動を展開したいと考えている。そのためにはまず、子どもの語彙の現状を把握することが前提となる。北海道国語教育連盟としては、仮説として以下の四点を考えて子どもの語彙の調査に当たった。

① 少子高齢化・核家族化などの影響で、季節を表わす言葉や挨拶の言葉など、人間関係を豊かにする語彙が失われつつあるのではないか。
② 学校で学習しても家庭や地域社会で使われなくなった言葉は、言葉としては存在していても意味合いは理解されていないのではないか。
③ ゲームやコンピュータ用語など、実体験とはかけ離れた言葉が子どもの世界の中で存在感を増大しているのではないか。
④ 国語の時間に行われている漢字や語句などの学習においても、日常の言語生活の変化によって大きな影響を受けているのではないか。

＜調査内容＞

・【挨拶・敬語】【北海道の方言】【ことわざ】【慣用句】【ふさわしい意味】【時間や季節】【外来語・コンピュータ用語】【漢字】【学習に関する言葉】
※問題作成に当たっては、文部科学省の田中主任視学官、水戸部教科調査官、冨山教科調査官の指導を受けた。
（一部過去の全国学力・学習状況調査との比較も可能になっている）

＜調査方法＞

・調査問題は各学年とも５０問。コンピュータによる採点・集計を行う関係から四者択一のマークシート方式。調査時間は、小学校３０分。中学校２５分。

＜調査対象＞

・道内各地の「小学校３年生」「小学校５年生」「中学校２年生」　計 12.000 名
（今後、定期的に追跡調査を実施する予定）

調査結果の概要

**１　挨拶・言葉遣い・敬語に関する問題、方言に関する問題の正答率は予想よりも高い傾向が見られた。**

→　生活の中で日常的に使われる機会が高い敬語ほど正答率も高い。
（おじゃします　いただきます）

→　方言の理解は、日常生活に密接に結びついている。方言に親しむ時間を設定しない限り、日常生活での実感がない方言は、存在感がますますなくなる。
(うるかす　ばくる)

**２　ことわざについての正答率は低い。**

→　学校で学習することが定着に大きな役割を果たしている。生活経験が増えると定着度がさらに大きくなる。

**３　慣用句、ふさわしい言葉を選ぶ問題は、課題が多い。**

→　慣用句の定着度が低いのは、生活の中で使われていないことの影響が大きい。
(「胸が痛む」「交通がとだえる」「中学生を対象に」の正答率は高い)

**４　ふさわしい意味を選ぶ問題の正答率は、授業で扱っただけではだけでは定着しない。**

→　正確な意味がわからずに、何となく使っている語句が多い。（じれったい）

→　日常生活で聞いたり使ったりしていない言葉は身に付いていない。

**５　時間や季節に関する言葉は、極めて正答率が低い。**

→　しかし、日常生活とつながりが深い「年中行事」や「祝日」の正答率は高い。
(節分　師走　秋分の日)

→　日常的に触れさせることで、語彙として身に付く。

**６　外来語の正答率は高い。**

→　子どもたちの生活の中に、カタカナの言葉が「音」として浸透していることが感じられる。

→　アクセスは、８３％の高い正答率。

**７　漢字や送り仮名、学習にかかわる言葉の定着に大きな問題がある**

→　漢字を正しく使い分ける事ができていない。　(計る、図る、測る、量る)

→　授業でしか使われない言葉は語彙として定着しにくい。(随筆　修飾語)

調査結果を受けて

１　語彙に関心をもたせる国語の授業を展開する。(学校の責務)

→　今日はこの言葉を学んだという実感を毎時間味わわせ、ノートにも書き込む。

２　国語だけでなく、各教科において各学年で習得すべき語彙を洗い出し、指導できるようにする。(国語科からの問題提起)

３　各家庭､地域社会で子どもの語彙に関心をもち､言語生活を豊かにするようかかわる。

→　家庭や地域社会で、遊びや自然体験を通しながら、他者との関係づくりに役立つ語彙を教えていく。

→　各家庭に日めくりカレンダー等を用意し季節に関する言葉をその都度話題にする。
（北海道と本州の季節感の違いも、家庭での会話のきっかけになる）

→　家庭での親子読書、地域や町ぐるみの読書推進活動等に積極的に取り組む

**・道民の皆さんが子どもの言語環境に関心をもち、意図的にかかわることによって子どもの語彙量は増え、日常生活に生きて働く国語の力を培うことにもつながる。学校・教育行政・地域社会・保護者が協力して、子どもの語彙を豊かにしていくための運動を積極的に展開していきたい。　（北海道国語教育連盟からの提言）**